養蚕家からパン屋へ

相馬（そうま）　愛蔵（あいぞう）（1870－1954）

アンビシャス・ガール

相馬（そうま）　黒光（こっこう）（1875－1955）

中村屋

株式会社
中村屋提供

§人物データファイル

出生

愛蔵は、明治３年（1870）10月25日、信濃国安曇郡白金村（後に穂高町、現・長野県安曇野市）に、相馬安兵衛の三男として生まれた。相馬家は祖父の時代までは代々庄屋を務めた名家であったが、家運が衰退。父安兵衛は明治４年（1871）他界して長兄安兵江（明治22年、安兵衛と改名）が家督を相続した。明治９年（1876）母ちか他界により、両親ともに死に別れる。

黒光は、明治８年（1875）９月11日、仙台県第一大区定禅寺櫓丁通本材木町（現・宮城県仙台市）に、入婿であった星喜四郎の三女として生まれる。初めは「菱（りょう）」と名付けられたが、姉が「蓮（れん）」で二人とも泥の中のものではかわいそうと「良」の字に改められたという。仙台藩に仕え、代々儒教を奉じる士族の家で、祖父雄記は少禄ながら藩の要職に就いていたが、慶応４年（1868）仙台藩の戊辰戦争敗北により家運が傾いていた。

生い立ち

愛蔵は、両親の他界により15歳年上の長兄・安兵江夫妻の嗣子として育てられた。明治11年（1878）７歳で穂高学校（学制頒布により県下で２番目に開校した研成学校が明治８年に改称）に入学。明治16年（1883）小学高等科課程に進むと、「規律正しい生活ができるから」との兄の計らいで寄宿舎に入る。明治17年（1884）、長野県中学校松本支校（現・松本深志高校）に入学。ここで生涯の友となる木下尚江（なおえ）と知り合う。数学が得意で

校中随一という成績だったが、英語が苦手で進級できない見通しとなり、３年級の３月早々に退校。明治20年（1887）上京し、開校５年目にあたる東京専門学校（現・早稲田大学）に入学、明治23年（1890）卒業。この間、友人に誘われて牛込市ヶ谷のプロテスタント・牛込教会（現・日本基督教団牛込払方町教会）に通うようになり、キリスト教界の元老である押川方義、内村鑑三らから教えを受けた。

一方の黒光は、明治16年（1883）片平丁小学校に入学。通学路の途中にあった「仙台教会」の雰囲気に惹かれ、日曜学校に入る。この日曜学校の教師が、後に良を相馬愛蔵に引き合わせる島貫兵太夫であった。当時義務教育であった初等科３年間を修了後、小学校高等科進学を希望するも、貧しい家計を理由に裁縫学校へ通わされる。しかしあまりの落胆ぶりを見かねた母巳之治により、明治20年（1887）東二番丁小学校の高等科へ進学を許された。明治22年、13歳で受洗。明治23年（1890）小学校高等科卒業。この年、父喜四郎が肺がんで入院し、翌24年２月他界。同年、開校５年目のミッションスクールであった宮城女学校に進学する。翌明治25年（1892）２月、教育方針に反発した小平小雪ら一部生徒の抗議文提出による退学処分に同調し、良も自発的に退学した。

実業家以前

愛蔵は東京専門学校卒業後、新天地を求めて北海道に渡り、札幌郊外に農園開拓を企て資金入手のため穂高に戻るが、長兄夫婦の反対により断念。穂高で養蚕の研究に取り組む傍ら、メソジスト派の牧師に同行してキリスト教伝道や禁酒会活動に力を入れる。これらの活動の支援者が愛蔵の中学校の同窓生・井口喜源治や、荻原守衛である。

明治27年（1894）研究成果をまとめた『蚕種製造論』を出版、明治33年（1900）に出版した『秋蚕飼育法』は版を重ねて５万部にも達し、養蚕が愛蔵の本業となりつつあった。栃木県那須野原にある孤児院が養蚕を始めると聞き、蚕種を寄贈。孤児院を訪問した際にその窮状を知り、牛込教会に通っていた頃から信頼していた押川方義が仙台教会を創立し、東北学院長を務める仙台に向かい、許可を得て押川の説教後に会衆に孤児院の支援

を訴えた。このことがきっかけとなり、後日、押川門下の島貫兵太夫から星良を紹介される。

この頃黒光は、母巳之治から許しを得て東京に出てきていた。明治女学校に入るつもりであったが、押川方義と島貫兵太夫の勧めに従い横浜のフェリス英和女学校に入学。祈りに始まり祈りに終わる寄宿舎生活には馴染んだが、信仰に迷いを生じ、文学に関心を持つようになり退学。明治28年（1895）文学的雰囲気の漂う明治女学校に入りなおす。この明治女学校の発起人で２代目の校長が、巖本善治（よしはる）である。はじめは文学色の濃い校風に満足した良だが、やがて物足りなさを感じる。小学校高等科の図画の教師でその後親しくつきあいのあった布施淡の婚約や、自らの書いた恋愛小説が元で新聞にあらぬ噂を載せられるなどの事件が後押しし、島貫兵太夫に紹介された相馬愛蔵と、明治女学校卒業後の明治30年（1897）に結婚する。

二人は東京・牛込払方町の日本基督教会で挙式し、穂高に帰郷。愛蔵26歳、良21歳であった。明治31年（1898）長女俊子誕生、明治33年（1900）長男安雄誕生。穂高での生活になじめない良は、気晴らしに文を書き明治女学校の恩師青柳有美（ゆうび）に送る。その文が『女學雑誌』に掲載されるさいに、巖本善治が筆名を「黒光」とし、これが生涯用いる名前となる。

明治34年（1901）９月、夫妻は兄夫婦から東京で独立して生活する許しを得、上京する。俊子を穂高に残すこと、安雄をいずれ本家の相続人とすること、養蚕の繁忙期は愛蔵が帰郷して仕事をすることが条件であった。

実業家時代

本郷で借家暮らしを始めた相馬愛蔵・黒光は、一般に馴染の薄く、かつ先発の店と力量に開きが少ない商売を始めようと考え、パン屋に目をつけた。明治34年（1901）12月30日、本郷区森川町１番地にて相馬夫妻の「中村屋」が開店。「本郷臺の書生麺麭（ぱん）屋」と題して東京朝日新聞に掲載されるなど、順調な滑り出しであった。明治40年（1907）新宿に支店を開店。当初は本郷本店からパンを運んでいたが、明治42（1909）年には製パン場を新設できる広さのあった現在地へ移転。この年より和菓子の販売を始め

る。なお、本郷店は大正８年（1919）まで生え抜きの従業員である長束實を責任者に営業を続け、長束の独立により長束に譲られた。

相馬家にはやがて荻原碌山（ろくさん）を中心に芸術家が多く出入りするようになり、「中村屋サロン」が形作られた。明治43年（1910）次男襄二と、彼を可愛がっていた荻原碌山が相次いで死去。体調を崩した黒光は、木下尚江に紹介された岡田虎二郎の静坐道場に通うようになる。

大正４年（1915）、岡田を通じて知り合った国家主義団体玄洋社の最高指導者・頭山満（とうやまみつる）の依頼により、ラス・ビハリ・ボースを約４ヵ月匿う。中村屋を出てのち17ヵ所も隠れ家を転々としたボースと中村屋の連絡役は、女子学院高等科に進学し英語が話せた長女・俊子が務めた。大正７年、俊子を見込んだ頭山の希望により、夫妻は俊子をボースに嫁がせる。俊子はボースとの間に１男１女を儲けるが、心労が重なり大正14年（1925）に26歳で死去。これを契機に愛蔵・黒光は浄土宗に帰依するようになる。

大正12年（1923）４月１日付で、中村屋は個人商店から株式会社に改組。昭和２年（1927）には店内の１階に喫茶部を開設する。ボースに紹介された純印度式カリーや、エロシェンコに紹介されたボルシチが看板メニューであった。また、夫妻が中国旅行で知り、研究を重ねた月餅や中華饅頭の販売も開始した。同年、仙川（現・東京都調布市）に中村屋牧場を開設。この年、四男・文雄が、かつて愛蔵・黒光夫妻を結び付けた島貫兵太夫が海外に新天地を求める移住者の援護のために組織した「日本力行会」を通じて南米ブラジルに渡る。しかし志半ばで昭和４年（1929）マラリアに倒れ、客死した。

昭和12年（1937）、夫妻の長男で２代目社長となる相馬安雄がデザインした中村屋のマークと中村不折（ふせつ）書の「中村屋」の文字を商標登録した。昭和14年（1939）株式を公開。王子製紙の足立正、岩波書店の岩波茂雄などを新株主に迎える。

昭和16年（1941）には人手不足の深刻化により、女性従業員の採用を始めた。また、企業整備令を踏まえた政府による工場等の接収を待たず、自ら軍需工場を立ち上げることを計画。長男・安雄が私財を投じる形で昭和

19年（1944）２月、粉末甘酒を製造する「航空食工業株式会社」が海軍（衣料廠）指定工場として誕生し、軍需工場として接収される危険のあった中村屋新宿第二工場、三鷹の大澤牧場、中村屋会館等を借り受け、金属原材料として供出寸前の機器器具類も買い取った。

昭和20年（1945）５月25日の空襲で中村屋焼失。愛蔵は戦火を避けて移り住んでいた五日市の大悲願寺から戻り、６月11日、中村屋解散を従業員に告げる。８月15日終戦。一週間もしないうちに、新宿大通り沿いの一帯では闇市が開かれ、中村屋の敷地も不法占拠される。昭和22年（1947）愛蔵は撤退を求めて訴訟を起こすが、当初、土地を占拠された13軒の商店中、行動を起こしたのは愛蔵だけであったという。係争は長引き、全ての土地を取り戻したのは昭和28年（1953）、愛蔵の死の前年であった。

社会・文化貢献

芸術に深い造詣を有し、物品両面で芸術家を支援した夫妻が主宰し、とくに黒光が女主人として尽力した中村屋サロンには、荻原碌山や高村光太郎、中村彝（つね）など多くの芸術家が出入りした。また、ロシア文学に関心を持つ黒光がロシア語研究を始めると、桂井当之助ら早稲田の若手研究者達も勉強会に参加し、英訳の『罪と罰』『アンナ・カレーニナ』などを読破した。黒光が島村抱月や松井須磨子と交流するようになると、戯曲の朗読会や演劇公演も行われるようになるなど、中村屋サロンは明治末期から大正時代にかけての芸術革命ともいうべき活動を支える一助となった。

昭和12年（1937）、愛蔵・黒光夫妻は、デンマークの国民高等学校に倣い、従業員のために「商売上の知識以外の基礎学問」を修める「研成学院」を設立。昭和19年（1944）に戦禍により中断されたが、夫妻の死後、昭和31年（1956）２代目社長の安雄により再開された。しかし、進学率の上昇により中卒採用をやめたことを受け、昭和37年（1962）３月に閉校。

昭和24年ごろ、愛蔵・黒光夫妻は、収入の千分の一を不遇な老人救済のための老人ホーム建設に寄付することを主眼とする「千一運動」を提唱。愛蔵は200万を、愛蔵の死後には黒光が100万円を寄付。多数の有志の義援金により、二人の没後の昭和30年（1955）に「黒光ホーム」と名づけられ

た有料老人ホームが、杉並区下高井戸の老人施設「浴風園」敷地内に完成した。

晩年

終戦で軍需部門を担う企業の任を解かれた航空食工業は、昭和20年（1945）９月「多摩川食品株式会社」と改称。昭和23年（1948）８月までは多摩川食品の製品供給を受けて、中村屋が販売する形で営業を続けた。

昭和23年（1948）８月、長男安雄が２代目社長に就任し、愛蔵は会長に退いた。９月には多摩川食品を中村屋に吸収合併。

その後も愛蔵は、「千一運動」など活躍を続けるが、昭和26年（1951）脳軟化症を患う身となる。昭和27年（1952）には夫妻の共著『晩霜』を出版。翌28年には黒光が、長男安雄の手を借りてまとめた『アジアのめざめ印度志士ビハリ・ボースと日本』を出版する。

昭和29年（1954）２月14日、愛蔵、自宅にて死去。享年83歳。その後、６月の取締役会で黒光は、中村屋の精神的支えとして相談役に任命される。この月から、朝日新聞「きのうきょう」欄にエッセイを連載するなど活動を続けるが、昭和30年（1955）３月２日、自宅にて昏睡状態に陥り、同日死去。享年78歳。夫妻は東京都府中市の多磨霊園に葬られた。

関係人物

荻原守衛（碌山）　彫刻家、荻原守衛（碌山）は穂高の出身で、愛蔵の禁酒会同志。画家を志しアメリカ・フランスに留学するが、ロダン作品に刺激され彫刻に転向。帰国後はアトリエと中村屋を行き来する生活を送り、家族同然であった。碌山を慕う芸術家たちが中村屋に集い、これが「中村屋サロン」の元となる。明治43年（1910）中村屋の居間で喀血し30歳で死去。黒光と次男襄二をモデルに描いた「母と病める子」、黒光を思い描いて制作したとも言われる遺作「女」などの作品がある。

中村彝　荻原碌山没後に中村屋サロンの中心的存在となる。病弱な彝を、黒光は中村屋内のアトリエに住まわせ親身に世話をした。大正４年、夫妻の長女俊子に求婚して黒光の不興を買いアトリエを去った。

ラス・ビハリ・ボース　イギリス植民地であったインドの独立運動の活動家。外務省から国外退去を求められたところを、国家主義団体玄洋社の最高指導者・頭山満が相馬夫妻の知己であったことから中村屋のアトリエに匿われる。後に、頭山の勧めにより夫妻の長女俊子と結婚。１男１女をもうけ日本に帰化するが、７年後の大正14年（1925）俊子は26歳で死去。ボースは生涯をインド独立運動に捧げた。ボースの手ほどきでつくった「純印度式カリー」は中村屋喫茶部の看板メニューとなった。

ワシリー・エロシェンコ　ウクライナ生まれの盲目の詩人。中村屋のアトリエに迎えられ、親身に世話を焼く黒光を母のように慕ったという。中村屋サロンの人々にロシア民話を紹介し、バラライカを奏でた。鶴田吾郎と中村彝は彼をモデルとした作品を残した。大正10年（1921）、社会主義者の嫌疑で国外退去命令が出る。中村屋に警官が土足で踏込み、身柄を拘束した際、その暴挙に対し愛蔵・黒光夫妻は淀橋警察署長を訴え、辞職させている。彼が紹介したボルシチは中村屋の喫茶部の看板メニューとなり、彼の着用していたルパシカは、中村屋店員の制服として取り入れられた。

木下尚江　明治・大正・昭和期の思想家・社会運動家。愛蔵の中学校の上級生として親しくなる。愛蔵は結婚の際、尚江の母に実家の遠い黒光の後見人を依頼しており、長女出産後体調の優れない黒光が養生に赴いたこともある。次男襄二や荻原碌山の逝去後、体調を崩していた黒光に静坐を提唱する岡田虎二郎を紹介したのも尚江であり、黒光は大正９年（1920）、岡田の死去まで日暮里の道場に通い続けた。愛蔵・黒光と尚江の友情は、昭和12年（1937）尚江の死まで続いた。

エピソード

明治34年（1901）穂高から上京した愛蔵・黒光夫妻は、パン屋を始める前に、１日３食のうちの２食をパン食にするという食事を３ヵ月続けた結果、パン食は便利で将来性があるという結論に達し、創業を決意。当時の有力紙「万朝報（よろずちょうほう）」に「食パン製造、及び道具一切譲受たし」の三行広告を出したところ、数件の申し込みがあり、その中から借家の近所で繁盛しており、試食期間中に利用もしていた「中村屋」を居抜きで購入。店名も

そのままに「中村屋」を開店した。

明治37年（1904）、シュークリームを食べてあまりのおいしさに驚いた夫妻は、餡パンの餡のかわりにクリームを入れたクリームパンと、ジャムが一般的であったワッフルの中身をクリームに換えたクリームワッフルを開発。クリームパンは木村屋が開発したアンパン、ジャムパンに並ぶ「日本の三大菓子パン」に成長した。

キーワード

良品廉売　愛蔵・黒光夫妻は、木下尚江の紹介で帰依していた岡田から、商売の極意は「良い品を廉（やす）く」と聞き、中村屋のモットーとした。

神奈川との関わり

黒光は、宮城女学校を退学後、押川方義らの世話で横浜にあったフェリス英和女学校に進学し、寄宿舎生活を送った。キリスト教に対する信仰に迷いが生じたころ、宮城女学校の先輩であった小平小雪の紹介で、『文學会』主宰である星野天知（てんち）を訪問。その後も星野の鎌倉の別荘である暗光庵にたびたび出入りしていた。

相馬愛蔵・黒光は、昭和５年（1930）、鎌倉の陣鐘山に土地を購入し、黒光庵と妙俊庵を普請。妙俊庵は従業員のための保養所として使用された。

§文献案内

著作

相馬愛蔵は、中村屋創業以前に蚕業関連の『蚕種製造論』『秋蚕飼育法』の２書を出版しており、養蚕家のテキストとして広く普及した。中村屋創業以降は晩年にいたるまで、愛蔵・黒光とも多数の著作を残しているが、その主なものは著作集に収録されている。

『相馬愛蔵・黒光著作集』全５巻　相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編　郷土出版社　1980～1981〈Y、K〉

『黙移』相馬黒光著　女性時代社　1936〈Yかな〉

昭和９年（1934）１～６月、雑誌『婦人之友』に連載した随筆『黙移』に続編を加えて出版した自伝的作品。前出『相馬愛蔵・黒光著作集３』にも収録。

『晩霜』相馬愛蔵・黒光著　東西文明社　1952〈未所蔵〉

夫妻の晩年を日記形式で綴った共著。

『滴水録』（私家版）　相馬黒光著　相馬安雄　1956〈未所蔵〉

夫妻の死後、長男により私家版で発行された。序文は安雄が執筆しており、「黒光ぐらい生涯を通じて自己の思いの侭をやってのけた人は稀であろう」と記されている。

社史

『中村屋100年史』中村屋社史編纂室編　中村屋　2003〈K〉

平成13年（2001）12月30日に創業100周年を迎え、その記念事業の１つとして初めて制作された社史。「第１部 中村屋原点の輝き（創業前期の創業者夫妻の生い立ちから、戦後復興の時期まで）」、「第２部　中村屋開かれる食文化（昭和26年から平成13年まで）」と資料編、年表からなり、中村屋のあゆみが見わたせる。

伝記文献

『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』　中村屋　1968〈K〉

『アンビシャス・ガール　相馬黒光』山本藤枝著　集英社　1983〈Y、K〉

「パン製造―新宿中村屋の創業者相馬愛蔵」橋詰静子著　『日本の「創造力」９　不況と震災の時代』　日本放送出版協会　1993　p353-363〈Y〉

「養蚕家からパン屋へ　相馬愛蔵」古澤夕起子著　『「職業」の発見』池田功・上田博編　世界思想社　2009　p211-224〈Y〉

¶参考文献

『安曇野』全５巻　臼井吉見著　筑摩書房　1965～1974〈Y〉

相馬愛蔵・黒光夫妻、木下尚江、荻原碌山、井口喜源治ら、信州安曇野に結ばれた人々を中心に、明治から昭和中期までの激動する社会、思潮、文化を描く大河小説。第10回（1974）谷崎潤一郎賞受賞作。

『俚諧薔薇来歌』島本久恵著　筑摩書房　1983〈未所蔵〉

相馬黒光の自伝『黙移』などの口述筆記をつとめた筆者による、黒光をモデルにした小説。　＜瀬戸清香＞